さとりの部屋
成人向け
FOR ADULT

さとりの部屋

さとりの部屋

～早苗～

文　三等兵

昔みたいに私だけを相手してくれなくなった。
昔みたいに私と遊んでくれなくなった。
昔は私だけを呼んでくれたのに。
早苗早苗って呼んでくれたのに。
どこかへ出かけて楽しそうに帰ってくる。
どこへ出かけたのか聞いても教えてくれない。
誰かに、誰かに、諏訪子様を取られている気がする。
誰？
一体誰が私の諏訪子様を――

「ちょっと出かけてくるねー」
お昼の食事の後、片づけをしている東風谷早苗――つまり私にそう告げるや否や、諏訪子様はてててっと飛び出していってしまう。
「……最近ウチに落ち着きませんねえ、諏訪子様は」
皿を重ねつつこぼすと、
「なんか知らないけど、いい遊び相手でも見つけたんじゃないか？」
神奈子様がお茶を飲みながらおっしゃる。
「そうでしょうか……」
遊び相手、ねえ。あのナマイキそうな氷の妖精とかかしら？
幻想郷に来て元気が出たことはいいことです。けど――
「なんだ早苗、やきもちか？」
茶化すような言葉で我に返った。
神奈子様が湯飲みを持ちながらニヤニヤと笑って私を見ている。
考えている事を見透かされたような気がして顔が熱くなった。

「ちっ、違いますよ！　そんなんじゃありませんから」
「早苗は諏訪子によく甘えていたからなー」
「も、もうそんな子供じゃありません！」
ぷいと、怒った振りをして居間を出る。
そう、もう子供じゃないんだから。
台所で食器を洗って片付け、ほうきを持って境内へ出て掃き掃除を始めるが、落ち着かない。
胸の中、あるいはお腹の底の方にもやもやとした、あるいは泥のような何かがつかえ、集中ができない。
……諏訪子様はどこで何をしてるのかな？　どうして私も一緒に……ううん、連れて行ってくれなくてもいいから、どんな遊びをしているのかくらいは教えてくれてもいいのに。
「はあ……」
ため息をつくと、視界の隅で何かが動いた。黒っぽい何かが。
「……？」
何か湧いたのかしら？　それとも瑞獣の類かしら？
とにかく確認をしなければ。と、消えていったと思われる方――神社の裏手へ足を向けた。
きちんと手入れのされた裏手へ出たが、特に何の気配も感じられない。
建物と山側の森の間には何の影も見当たらない。
「……気のせい？」
首をひねりつつ境内に戻ろうとすると、がさりと葉のこすれるような音がした。あわてて振り返ってもやはり何もいない。
「妖精かな……」
だとしたら、神社でいたずらなどされたらたまったものではない。
捕まえて説教をしてやらないと。
そう思って森へと足を向ける。木々の葉が日の光を遮って薄暗い

道でもない道を歩くと――
「……何かしら、これ」
急に木々が切れて原っぱに出た。不思議に思ったのはその草むらの中にぽっかりと暗い穴が開いている。
覗きこむと中は石で出来た階段になって地下へと続いている。
「こんな物……いつの間に？」
今までまったく気づかなかった。この近くに来たこともあったのに。
「いったい誰が……」
戻って神奈子様に相談しようかとも思ったが、
「……もう、子供じゃないもの」
虚勢を張るようにつぶやいて、ひんやりとした空気が漂ってくる地下へ、足音を立てないように気をつけて下りていった。
……結構深い。
入り口が小さな点に見えるほど階段を下りると、
「あれ……？」
厚みのある鉄扉に行き当たった。その扉の向こうからうっすらと明かりと何か声が、それも熱を帯びた許しを請うような声と、聞き慣れた――それでも聞いたことのない冷たい――諏訪子様の笑い声が漏れてきていた。思わず生唾を飲み込んで、光の漏れている隙間へ目を寄せた。
そして――
「あ……」
扉の向こうの光景に息を呑んだ
「うっ……は、あぁ……んんっ……」
うめくような、だが熱を帯びた声が薄暗い石造りの部屋の中に響く。
淡い明かりに影絵のように浮かび上がるのは一つの幼い少女と、もう一つ太い縄のような物に絡まれ、声を上げた少女。
声の主は地霊殿の主――古明地さとり。
さとりは一糸まとわぬ姿のまま少し上半身を起こし、仰向けに石畳の床の上――正確には淡い明かりをぬらぬらと表面に反射させて這う無数の触手の上――で喘いでいた。
手は後ろで縛られ、胸には第三の目がかろうじてぶらさがっている。その目の光は半減していた。
その蠢く床から伸びた、半透明の表皮を持ち先が細い触手がさとりのすべらかな白い肌へ、粘液をぬめらせながら幾本も這っている。
それらは胸ではなだらかな、控え目なさとりのふくらみを確かめるようにふにふにとまるで甘噛みするように這い、脇の下や太ももではぎちゅぎちゅと締め付けるように這っていく。そして――
「あうっ！」
どこか敏感な所に触れたのかさとりの口から少し強めな反応が漏れると、触手達はその身をたぎらせ、じゅるじゅると音を立てながらますますさとりの身体をまさぐる。
触手達のその動物のような性欲、というより性衝動が第三の目を通じて伝わってくる。反応すれば触手達はますます生臭い匂いを強め、自分の身体を責めてくるのがわかっているさとりは必死で声を押し殺そうとするが、
「う、ぁ、くぅ……」
食いしばる歯から吐息のように漏れてしまう。
「ふふふ……」
そしてそんなさとりをくすくすと、愉快そうに眺めているのは目玉のついた帽子に蛙の刺繍の入った服を着た幼い少女――洩矢諏訪子。
触手が固まってできた椅子に腰を下ろし、片あぐらの膝に肘をの

せて普段の外で見せる表情と大差のない無邪気な、それでいて少し酷薄な雰囲気を漂わせていた。

「ひう!?」

触手の一本がさとりの菊の花弁をぬらりとなぞると、ぞくぞくっとした感触が背筋を上った。

その反応を見た触手達がぬらぬらと粘液を滴らせてすぼまった菊の花弁へ集まり、争うようにそのすぼまりを広げていく。

「や、やだやだやだ！　やめてっ!!」

泣きそうなさとりの口から今日初めての哀願が漏れた。だがそんな言葉は当然誰も聞き入れず、しわを伸ばされ開ききった菊穴がさらされた。

羞恥よりもその無防備に開いた穴に今にも触手が飛び込んできそうな恐怖に背筋が震える。

「んふ～？」

座ったままの諏訪子が笑みを浮かべ、右の人差し指でくるりくるりと、ゆっくり、空に小さく円を描くと、触手の一本が菊穴のふちを同じような動きでなぞり始めた。

生暖かい粘液をまとった触手のぬるぬるとした感触に、

「ひっ!!」

さとりがまた怯えた短い悲鳴を上げて身を固くさせる。ざわざわと、触手達が波立つよう蠢く。伝わってくるのは『声』というよりは気配。触手達のさとりの肉穴に潜り込みたいという牡の肉欲の気配。

飛び掛ってこないのはただ単に諏訪子が許していないから。

もし許可を、あるいは命令をすれば触手達はさとりの穴に精液に似た生臭い白濁液を際限なく注ぎ込むだろう。

そしてそれをしないのはただ単に嬲りたいだけという事もさとりは理解している。

この得体の知れない地下室に閉じ込められ、昼も夜もわからずに気が向いたときにやってくる諏訪子の慰み物として触手達に嬲られ続ける。気を失ったこともあれば、丸一日以上放置されたこともあった。

もう何日過ぎたのかわからない。

逃げようとすれば触手達が即座にさとりを捕らえ、泣こうがわめこうが気絶するまで口を、菊穴を、膣穴を、穴という穴を白濁液であふれさせ、気絶するまで犯し続ける。

そして、いつの間にかやってきた諏訪子は見下ろして笑う。

「ダメじゃない。勝手に逃げようとしたら。あははは」

怒らずにあははと笑う。飼っていたペットが粗相をしたのを見つけたときのように『しょーがないなー』と。生臭い白濁液まみれの姿をまるで泥遊びでもしてきた子供を見るように。

そしてそれがまぎれもない本心なのだと、心が読める『覚り』妖怪故に思い知らされる。

諏訪子はただただ楽しむ。さとりの反応を。心を読めてしまうが故の絶望を、羞恥を、恐怖を。どれに転んでもけらけらと。

「さて……そろそろ欲しくなった？」

にっこりと、諏訪子が優しい笑みで、さとりにとっては背筋を震わせるような事を聞いてくる。『声』はただ単に『どっちかな？』としか思っていない。

「……」

さとりは答えられない。欲しいと答えればすぐさま何度も何度も絶頂に達して気絶するまで触手に責めさせ、欲しくないと答えれば哀願するまであらゆる手を使って責め立てる。そして答えなければ答えないでやはり責め立ててくる。

「……ふ、ふふ、もうだーいぶこなれてきたかと思ったけど、まだだったかなー」

諏訪子はまたもやにこりと笑う。邪気のない、故に残酷な笑み。それを見てしまったさとりは思わず反射的に内股を閉じたが、諏訪子はそれにはかまわず右の人差し指を再び、先ほどより小さく回す。

ずるりと、先端に小さい口のような穴の開いた触手が二本伸び出てさとりの胸の桜色の乳首に吸い付いた。

「やっ、やめっ、ひゃうっ！」

じゅるじゅると、音を立ててしゃぶる触手の中で乳首が生暖かい粘液にまみれつんと尖り、甘い快感を伝えてくる。

「こーんなに敏感になってるのに。くすくす……」

「うぐ……っ！　あうっ!!」

触手はただ単に吸い付くだけでなく、微妙に力加減を変えて乳首を刺激してくる。じわりと、熱くなる自分の身体にさとりは失望を覚えつつ、漏れ出る甘い声を必死にこらえる。

そんな様子を諏訪子はにやにやと見て、

「くふふ、じゃあこういうのは？」

再び指を動かして触手を動かす。開きっぱなしだった菊穴のふちを細い舌状のものを伸ばした触手がなぞり、ぞわぞわした背徳的な刺激を走らせた。

「やっ、やめ、ああっ！」

顔を赤らめたさとりが、上下から迫る快感から逃れようと身をよじる。

そんなさとりを愉(たの)しそうに眺める諏訪子が、恐ろしいことを口走った。

「ねえねえ、このコがさー」

ぬるりと、諏訪子の横に細い手首くらいの太さの触手が蛇のように鎌首をもたげ、先端から白濁液を滴らせて立っていた。

「我慢できないんだってさ。あはは、ちょうど開いてるソコに入れちゃってもいいかな？」

諏訪子が無邪気に広げられている菊穴を指差した。

ま、またお尻にあんなモノが……っ！

全身から血の気が引いて肌があわ立ち、そして菊穴の中に内臓を掻き回されるあの感覚が甦っていく。

「い、いやっ！　お尻はいやぁっ!!　お願いします！　許してください!!」

表面に垂れる白濁液の生臭さがとても強く、ここまで漂ってくる。そんな触手が開かれた菊穴へ入りこんだ時のおぞましさを思い出すとさとりは涙を浮かべ、恥も外聞も無く懇願した。

「そう？　じゃあ……」

すると、諏訪子がにこにこと笑いながら指差す方向を変えた。少しだけ指を上げ、さとりの口へ。

「ひっ!!　う、うぐっ!?　ぐ……っ!!」

触手が小さな口をこじ開けるようにして踊りこんできた。

口の中が触手とその粘液の生臭さで満たされ、反射的に吐き出そうとすると、

「あ、もしそのコを口で満足させることが出来なかったら……わかるよね？　『覚(さと)り』なんだから」

にっこりと笑みを浮かべて言った諏訪子の言葉と『声』に目を見開く。

――口で満足させられなかったら、開かれた菊穴に入れさせよう。

「う……」

「ほらほら、前にもやったことあるでしょ？　早くしないとそのコが口から出ちゃうよー」

くすくす笑う声。屈辱に涙をにじませながらも、口の中でうねうねと動く触手に舌を這わす。するとビクンと口の中で触手がはねるように震えた。

「そうそう。ほら、もっと舌使わないと――」

ぬるりと、菊座を触手が這う。
「!?　〜〜〜っ!!」
びくりと、身体を震わせてさとりが懸命に舌を使う。口にひろがる触手の先端をちろちろと嘗め回す。
「んっ、んんっ、んっ」
やだやだ、こ、こんなのが、こんなのがお尻に……。
菊穴にねじ込まれることを恐れる一心で口淫に没頭していく。
口をふさがれ生臭い粘液にむせながらも、口からこぼさないように頭を動かしながら愛撫していくと、次第に頭がボーっとして身体が熱くなってきた。
『声』を感じる。
触手の裏側の出っ張った突起をさとりの舌が刺激すると、口中の触手がビクンと跳ね、とろりと先端から汁を滴らせた。そのときにさざめくような、感情の波を感じた。それは歓喜のような悦びの波長。熱に浮かされた頭で理解した。
ああ、こうするのがいいんだ……。
「んっ、んっ、んっ、んっ……」
さとりの頭がいつの間にか一定のリズムで前後に動き、触手を舌と唇ですぼめるようにしごいていく。
とろ、とろと、口中の触手の先端からあふれ出る汁の量が増え、匂いがどんどん強くなってくる。
そのあふれる汁を飲み、飲みきれない分は口の端からじゅぶじゅぶと泡立ててよだれの様にこぼしながらも口淫を続ける。
あ、悦んでる……。
脈打つ血管のような筋を舌でなぞり、汁のあふれる先端の裂け目に舌を這わせながら、ほんやりとさとりは『声』を聞き、その聞こえる『声』に合わせて舌を動かす行為に没頭していく。
乳首や菊穴の刺激に身を震わせ、意図的に手をつけられていない秘所を熱くさせて、後ろ手に縛られた裸体を朱に染めながらじゅ、じゅる、ぴちゃ、と、すする音を薄暗い地下室に響かせる。
「ふふふ……」
そんなさとりを諏訪子は飼っているペットが芸をうまくこなしたときのような笑みで見守っている。
優しく、ほほえましい物を見るような表情で。
不意にさとりの口中で触手がぐぐっと大きく膨らんだ。
「うぐ!?」
次の瞬間、触手の先端から激しい勢いで白濁液が吐き出された。
「ぐぅっ!?　うぐっ!?　んぐぅぅぅっっっ!!」
びゅるびゅると脈打つ触手から吐き出される生臭い汁はすぐさまさとりの小さな口内を満たし、頬を膨らませていく。触手にふさがれた口から吐き出す事のできない白濁汁が、次から次へとさとりのノドの奥へ流れ込み、強制的に飲まされていく。
「ん、んふっ、んぐっ……」
出てる……いっぱい出てる……。
息のできない苦しさの中で判断する暇も無く、生臭く忌まわしいはずの白濁液をごく……ごく……と飲み下していった。
やがて触手は全てを吐き出し終えると、ぬるりと口から抜け落ち、同時に身体を拘束している以外の、乳首や菊穴を攻め立てていた触手が床に埋まるように沈んでいった。
「ごほっ、げほっ……」
目を涙で潤ませながら咳き込むさとりの耳にパチパチと、小さな拍手の音が聞こえた。荒い息のまま力なく視線を上げると、
「あ……」
諏訪子が満足そうな顔でさとりへ拍手を送っていた。
「やー、すごかったねえ。あのコ、口だけで満足しちゃったよ」
にこにこしながら立ちあがってさとりのそばへ寄ると、両膝に手

を置いてしゃがみこみ顔を近づけた。
「ねえ？　上手になったよねえ」
にたりと、冷たい笑みに変えてさとりの頭をなでた。
「う、うあ……」
その言葉で途端にさとりは羞恥と屈辱で身体を熱くさせ、目を伏せた。あんなに嫌悪していた触手に懸命な愛撫をしていた自分を自覚して。
「あんなにあのコのために一生懸命……うんうん。感動したよ」
「くっ……」
身体に覚えこまされたとはいえ、行為に没頭した自分に歯噛みをする。だが、たとえ何を言ってもその言葉尻を捕らえて辱めてくるのが分かっているから、ただ黙っているしかなかった。
「で、だいじょーぶ？」
かぶせるように諏訪子が問いかけてきた。さとりは彼女が自分の身体を心配して聞いてきていないことはこの地下室に連れてこられてからの経験で知っていた。いぶかしげに思っていると、『声』が聞こえてきた。
『あのコの汁って――』
「っ!?」
そこまで聞いて思い出した。無理やり飲まされた白濁液で身体が熱くなり、
『身体がすっごく敏感になるんだよねー』
触手に自分の陰部をかき回してくれるように懇願したことを。
ずくんと、下腹が鼓動をするように熱を持った。
また、あの時みたいに……っ!?
「い……いやっ！」
怯えた表情を浮かべ、声に出して拒絶する。
こんなおぞましいモノにただ嬲られるだけじゃなくて、自分から淫らに腰を振ってそのモノを哀願するのはもう嫌だった。
いや、正確にはおぞましいモノに膣内の肉をかき回される刺激や、膣奥でとめどなく吐き出された生臭い白濁の精液を子宮へ叩きつけられる衝撃に酔い、あらぬ猥褻な言葉を口走って恍惚と絶頂に至る自分を見るのが嫌だった。
目を閉じて子供のように首を振るさとりに諏訪子は、
「んー、でもさあ……」
わざとらしい困り顔を浮かべ、指を振るう。
すると触手が音を立てて蠢き、再度さとりの身体に巻きつき始める。
「きゃあっ!?」
太ももやふくらはぎに巻きつき、さとりを少し床から持ち上げ、
「やめてっ！　見ないで!!」
わめく声を無視して幼児に用を足させるような、Mの字の格好で触手が足を左右に開かせる。くちゃりと晒された秘所の前に諏訪子がかがみこんで「わー」と声を上げながら観察を始めた。
「ああ……」
「あはははは、ほらほら、こんなにびちょびちょになってるじゃない。こんなに真っ赤にしてだらだらよだれたらして……、うわ、お豆さんがこんなに大きくなって顔出してる。我慢できないんだねー」
さとりは絶望的な気持ちで目を閉じ、真っ赤な顔を横に背けて愉しそうに解説する諏訪子の声を無視した。――が、
「じゃあ、あの黒っぽいコでも呼ぼうか？」
覗き込んださとりの股間で諏訪子がくすくす笑いながら言った言葉に、
「や、やめて！　あれはいやあああああっ!!」
反射的に叫んだ。あの、膣内に入り込んで理性を狂わし、中で凶悪な太さに変わるおぞましい触手。前に使われたときの恐怖を思い

出して逃れようと身をよじる。がっちりと巻きついた触手が離すわけが無いのは分かっていても、そうせずにはいられなかった。
「あーあ、あのコも嫌われちゃったねえ。……ねえ、そんなにあのコはイヤ？」
静かな問い。はっとなったさとりが諏訪子を見れば、口元はわずかに笑っているが、目は少しも笑わずにじっと、見つめてきた。
『声』も聞こえない。ただ、さとりの返答を待っていた。
「……」
思わず息を呑む。だが、あの薄黒い触手に身体をいじられるのだけはどうしてもイヤだった。
「あ……」
だから、怯えながら言葉を選び――
「お、お願いします、あ、あれだけはやめてください、お願いします、お願いします、お願い……」
あごを引いて、今の体勢でも下げられる限り頭を下げ、哀願した。頬に涙が伝う。羞恥か屈辱か、自分では分からなかった。ただ、淫欲にまた狂わされることが純粋に怖かった。
「……ふーん。そんなにイヤならやめてあげても良いよ」
「……え？」
一瞬耳を疑った。
だが、すぐに『声』と次の言葉で理解させられた。
「代わりにさー」
ずるりと、諏訪子の隣で今まで見たことの無い薄緑のつるりとした触手が立ち上がるように伸びた。
「このコの相手をしてあげてよ」
先端は片側が半円のように平べったくなっていて、そこに黄色い触覚のようなものがびっしりと生え、それらをわさわさと蠢かせて揺れている。

見たことの無い触手。聞こえてくる『声』は強い肉への欲望。粘液を滴らせるその姿が自分を捕食しようと、よだれをたらしているように見えてぞくりと、さとりの背筋に悪寒が走った。
「ほら、遊んで」
諏訪子はそんなさとりに頓着することなく触手を促すと、身を固くしているさとりの胸へ、その黄色い触覚面をへばりつかせた。
「ひっ!?　あっ、やだっ、気持ち悪い！」
ぬるぬるとした肉のモップが這うような感触に思わず声を上げる。
「このコ変わってさー」
諏訪子はニコニコしながらさとりの身体を這う触手を見ながら言う。
「ううっ」
胸から鳩尾（みぞおち）へと、粘液の足跡を残しながら這いずる。黄色の触角で肌を探るような感触が気持ち悪くてさとりが身悶えた。
「ヘンなところが好きなんだよ」
そしてお腹の真ん中のくぼみ――臍（へそ）へたどり着くと、
「いぃっ!?」
ずるりと、こすり付けるように先端を押し込んだ。
「やっ！　そこっ、ちがっ、うぐぅ！」
「あはは、ヘンだよねー。おへそが好きなんて」
触手は粘液を撒き散らしながら細い無数の触角で臍の中をまさぐり始めた。内臓を直接弄（いじ）られる奇妙な感覚が湧き起こる。
「や、き、気持ち悪い、やだあっ!!」
「だいじょーぶ、だいじょーぶ。すぐね、効いてくるから」
「な、なに……っ!?　あ、熱いっ!!」
じんわりと、触手にまさぐられている臍の辺りが熱く感じる。ぬるぬると内臓を掴まれる感触が走るたびに身体中がびくびく震えた。
「あはは、良くなってきたみたいだねえ。そのコにされると色んな

所が敏感になるんだよ。けど、そのコはおへそばっかりいじるんだよねー」

びちゃびちゃと、臍で触手がもがくたびに乳首が尖り、何も挿入されていない膣穴がぎゅううっと締まり、奥から白く濁った濃い淫汁が垂れる。

「だからそのコにされちゃうと、おへそが気持ち良いところになるんだよ」

身体の奥底、内臓をかき回される感覚で頭がぐちゃぐちゃになりそうなほど気持ち悪い。そのはずなのにもう一つ違う感覚がそれをかき消すように、味わったことの無い快感が電流のように全身を駆け抜ける。それに引き込まれそうになる自分に恐怖を覚え、叫んだ。

「や、やめてっ！　お願い、とめ、あっ、ああああっ！」

だが、激しい快感に言葉が続かない。M字開脚のまま頭と背をのけぞらせて身悶える。

臍の短いくぼみがまるで肉芽（クリトリス）でできた肉穴になったような、感じたことの無い強烈な快楽が脳を打つ。

「お、おへそ、おへそやめてえっ！　や、やぅ！　許して！」

視界が連続するフラッシュのようにチカチカする。全身がこわばって細かく痙攣していく。

「うんうん、気に入ってくれたみたいだね。胸もそんなに尖らせて、アソコなんてすごい牝臭いや。周りの他のコが我慢できないかもよ？　……あらら、もう聞こえてないや」

脅かそうと思った諏訪子の言葉はもうさとりには聞こえてなかった。にちゃにちゃと音を立てながら迫る快楽にもう思考は真っ白に塗りつぶされ、そして――

「あああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～……っ！！」

ぷしゅっと、音を立てて秘所から潮を吹き、身体を大きく跳ねさせると、痙攣をしながら背骨が折れそうなほど身体をのけぞらせた。

やがて噴き出した潮がぽたぽたと垂れる雫になってようやくカクンと、糸の切れた人形の様に脱力した。

「あ、終わったみたいだね。お疲れ様ー」

諏訪子が軽い用事を済ましたような口調で声をかけてきたが、

「わ、わたし、おへそ、で、こんな……おへそでイっちゃった……」

さとりは激しい息切れをしながらつぶやいた。

自分の身に起こったことが信じられない。臍でこんな絶頂を迎えるなんて……。

半ば呆然としていると、諏訪子がさとりの顔を覗き込み言った。

「うんうん、良かったねえ。使える所が一つ増えたよ」

「ふえ……た……？」

「あとはそうだなー、口もおへそとおんなじ位になればきっとものすごいことになるよ。全部いっぺんにやっちゃうの」

「そんなの……むり」

「無理じゃないよ。今できてたじゃん。他には……そうだ！　胸や耳なんかもつかえるようにしたらどうかな？　脇もいいかも！　それで全部責めたらすっごい事になるよ！　ねえねえ、どうかな？」

「……」

さとりはぐったりとして目を閉じて答えない。

「ありゃ？　気絶しちゃったか。うーん、体力少ないなあ。でもせっかく手にはいったんだし、壊しちゃ意味無いよねー」

そこで諏訪子は言葉を切り、薄闇の向こうの、地上へつながる扉を見た。

壁と扉の間からかすかな光が漏れている。それを確認すると諏訪子は顔をほころばせた。

「うふふ、今日はここまでかな、私は。じゃあね、また遊ぼう」

意識の無いさとりにそう言葉を投げかけると、帽子をかぶりなおして扉へ向かった。

「う、ううん……」
　噎えた生臭さが鼻についてさとりは意識を取り戻した。
　触手の床に全裸で横倒しになったままの身体を起こそうと、手をつこうとして、
「あ……」
　まだ腕が後ろ手に拘束されていることに気づいた。それでもぬるぬるとした床に頬が密着しているのが気持ち悪いので、肩を使ってなんとか横座りの体勢になった。
　周りを見渡して諏訪子の姿が見えないことに安堵しながらも、
「う……わ……」
　座って自分の臍を見下ろして声を漏らした。くぼんだ臍の周りで触手の粘液がまだ乾かずにぬらぬらとぬめっているのを見て、さっきの自分の痴態を思い出す。
　臍を犯され、諏訪子に見られながら絶頂に達した。
「おへそ、でなんて……」
　落ち込み、そして軽く恐怖を覚える。確実に変わっていく自分に。
「……やだ」
　体育座りのように立てた両膝に顔を埋め、小刻みに身体を震わす。
　……怖い。
　この薄暗い地下室で自分がどうなっていくのか。あの神の気まぐれの遊びに付き合わされて、それから――
「……!?」
　さとりがそこまで考えたとき、鉄扉の軋(きし)む音が地下室に響いた。
　顔を上げて扉を見れば、鉄さびた音をたてゆっくりと開いていく。
　そして逆光に人影が浮かび上がった。
　諏訪子が再びきたのかと一瞬怯えたが、よくよく見れば身長が違う。諏訪子よりも高い。
　ゴトンと、重々しい音がして扉が閉まり、再び地下室は淡い明かりのみとなった。
「……」
　きゅっ、きゅっと、変わった足音を立てて影の主は一歩ずつ、真っ直ぐにさとりへ向かって歩いてくる。一言も発さずに。
　だが『声』は聞こえた。第三の目を通じて。そして混乱した。
　なんで……？　なんで彼女が？
「……」
　無言のまま座り込んださとりを見下ろしたのは、御幣(ごへい)を強く握り締めた守矢神社の風祝――東風谷早苗。
　諏訪子が出入りしているこの場所に早苗が来るのはおかしいことではない。恐らくこの場所は守矢神社からそう離れた所ではないと、諏訪子の言動からさとりは見当をつけていたからだ。
　さとりが疑問に思ったのは、ここに現れた早苗が、早苗の『声』が怒り狂っていたからだ。――さとりに対して。
「……何故？　何故、貴方は――きゃっ!?」
　バチンと乾いた音が地下室に響く。無言で歩み寄った早苗が有無を言わさずにさとりの頬を強く打った。
「……な、なにをするんですかっ！」
　じんとした頬の痛みに怒りを覚え、座ったまま早苗を睨(にら)みつける。
「……何を？　白々しい！　こ、この泥棒猫っ!!」
「ど、泥棒猫？　私が!?」
　あまりにも予想外の言葉にさとりは思わず聞き返した。
「そうよ！　諏訪子様を誘惑して、あんな、あんなことを……」
「ち、違うわっ！　私じゃない！　私はここに無理矢理――」
「うるさいっ!!」
「きゃあっ！」
　パシンと、再び早苗がさとりの頬を叩いた。

「貴方が、諏訪子様を……」
興奮して語尾を震わせる早苗の『声』が第三の目に流れ込んでくる。
『諏訪子様がこの女あんな許せないいやらしい私を誘惑した嘘つき原因は気持ち悪い私が』
整然としない言葉の羅列が流れ込んでくる。共通しているのはどろりとした、煮えたぎる黒い泥のイメージ。
ニンゲンが良く持つ、地底でもそれを持ったが故に鬼になった者がいた。
ああ、ああ、私は知っている。この感情。
――それは嫉妬。
「ふ、ふふふ……」
そう思い当たって笑ってしまった。嫉妬？　今のこの私に？
守矢の巫女とはいえ、所詮ニンゲンね。あの掴みようのない諏訪子に比べれば格段に分かりやすい。
「何がおかしいのよ……」
早苗の目が据わり、危険な色に染まる。だがかまわずに続けた。
彼女のは八つ当たりだが、私も変わらない。けど、せずにはいられなかった。意味もなくこの地下に囚われ、弄ばれてきた鬱屈が言葉をつむがせる。
「だって、あの神様を私にとられたって、勝手に勘違いして私を責めるんですもの。笑うしかないわ」
諏訪子から受けた屈辱を、羞恥を、恐怖を、少しでも発散させたかったから。
「それは貴方が――」
「私が誘惑した？　ははは、どこの世界に後ろ手に拘束されて誘惑するやつがいるのかしら？　本当は気づいてるんでしょう？　あの神が、諏訪子がやったって。こんな地下室、私に造れる訳がないでしょう？」
だけど――
「そ、そんな事！」
「あ、今思ったわね。『ひょっとして諏訪子様が』って。本当は気づいているんでしょう？　ふふふ、『覚り』に嘘はつけないわよ」
それが――
「……黙れ」
「……ああ、本当は貴方が遊んでもらいたかったの？　私がされたようにあの神にこの汚らしい触手で――」
いけなかった。
「黙れえええええええええええええええええっ!!」
「うぐっ!?　ぐっ、ぐううっ!?」
早苗の絶叫とともに口がふさがれた。手ではなく――触手に。
口中に広がる生臭い匂い。ぬるぬるとしたノドに絡まるような粘液が口の中にあふれて息が詰まる。首を振って逃れようとしても、逆に奥へ奥へと入り込んでくる。
「んーっ！　んんっ、んーっ!!」
「……は、はは、あはははははははははっ!!」
突然のことに一瞬唖然としていた早苗が笑う。際限なく、狂ったように。
「どうしたの？　それが好きなんでしょう？　さっきみたいに悦んでしゃぶればいいじゃない!!　ほら！　ほら!!」
早苗が触手を掴んで口の中へさらに押し込もうとする。
「うっ、うぐっ、ぐぐぐ……げっ、げほっ!!」
不幸中の幸いというか、早苗が手で押さえてくれたおかげで触手の動きが止まり、口から吐き出すことが出来た。
「な、なんで……」
触手が勝手に私の口の中に？　こいつらは諏訪子の命令で動くん

じゃ……？　え……？

その疑問に答えるような『声』が聞こえた。

「……」

無言の早苗の命令。そしてその『声』に応えるように、触手達が動いた。その『声』の命令通りに、後ろ手のさとりの腕に巻きつき、早苗の目線より少し高い位置に吊り上げた。

「……へえ、私の言うこと聞いてくれるんだ」

今度はわずかばかりに見下ろす位置になった早苗が、人差し指を唇に当ててつぶやいた。

触手が自分の意のままに動くと知った早苗の浮かべたイメージがさとりに流れ込む。

「う……」

そのイメージにさとりは思わず息を呑んだ。それは嗜虐(しぎゃく)の想い。今さとりを見つめる身の毛のよだつ視線と同じもの。

その目つきを見て、背筋がぞっと寒くなる。諏訪子の無邪気さとは違う、ニンゲンらしい昏(くら)い感情を宿した視線。

「……ふふふ。ねえ、好きなんでしょ？」

早苗が妖しく笑う。その声に応じるように、ずるりと数本の青い触手が立つ。口のように横に裂けた先端から粘液があふれているのが、やはり獲物を前によだれを垂らしているようにも見える。

「……ひっ!?」

早苗の意図を読んで反射的に胸をかばおうとするが、腕は触手に縛られている。無防備な乳房に触手が絞るように巻きつくと、先端をくちゃりと開いて無防備な桜色の突起へ吸い付いた。

「あぐぅっ!?　い、痛い！　痛い痛いっ!!」

吸い付きが強すぎて乳首が引きちぎられるような痛みが走る。身をよじって苦痛から逃れようとしても、拘束された身ではどうにもならない。

「わざとらしい。ホントは気持ちいいんじゃないんですか？」

早苗が疑わしい視線を投げかけてくる。嫌味でもなんでもなく、純粋にそう思っている。諏訪子のときは気持ちよさそうにしていたと。それを確かに見たのだと。

「ち、違うっ！　さっきのは触手の……」

「ふうん？　触手が……どうしたの？」

「っ！　……」

「あ、黙っちゃうんだ。そう。貴方達、引き千切ちゃっても良いからもっと強く――」

「あ、ああっ、や、やめて！　これ以上引っ張ったら本当に、本当にちぎれちゃうっ!!」

「教えてくれる？　触手の、なに？」

早苗がにっこりと笑みを浮かべ、だが、右手に握った御幣をさとりの胸に当てて尋ねた。答えなければ触手をけしかけて、

『一つくらい千切れても大丈夫よね。二つあるし。それに妖怪だし』

ぞっとするような事を本気で考えていた。それがさとりには聞こえていることを承知の上で。その思考が何よりも恐ろしい。

こ、答えないと、早苗は本気だ……っ！

「あ、しょ、触手の……精、液を飲んだ、から……」

痛みと恥ずかしさに涙をにじませながらも、その言葉を口にする。それを口にすればどうなるか。大体の予想はつく。それはそれでおぞましいことだけど、もし、ここで早苗に逆らったらどうなるか。

予想はできない。いや、嫉妬に狂ったニンゲンが抵抗できない妖怪をどう扱うのか予想したくなかった。

心を読めるから、余計に恐ろしかった。

視線を落とし震えていると、すっと胸に当てられていた御幣が引かれ――

「は、ははっ、あはははは！　あはははははははははっ!!」

早苗の哄笑が響いた。勝ち誇ったような、耳を苛む笑い声。どろりと、早苗の中の黒い泥がさらに濁る気配を感じた。

「精液？　触手の？　あはははははははは。そう、そんな汚らしい物が欲しかったの。あはははははははは。そういえば貴方さっき触手を一生懸命嘗め回してたわよね！　ゴメンゴメン、すっかり忘れてた」

「く……っ！」

羞恥で顔が熱くなる。そうか、彼女は覗いていたんだ。私が諏訪子に弄ばれているところを。だから諏訪子と私のことをそんな風に思って……。

攫われてここに連れてこられた、なんて言っても今の早苗は私の言葉なんて信じてくれないだろう。あそこまで混沌とした黒い心の中で彼女が思うことは私を辱める事。諏訪子を誑かした妖怪として。

自分の心が暗く沈んでいく。

無数の触手に囲まれ、逃げれば犯され。何を言っても信じてもらえない。

私は嘘も誤解も『声』を聞けばすぐに分かる。

だけど、自分が誤解され、嘘をついていない事をどう伝えればいいというのか。

ましてや嫉妬に狂ったニンゲンに――

身体を拘束していた触手がさとりを少し低い位置に下げると、じゆるりと、乳首に喰らいついていた触手が名残惜しそうに離れていった。

「あ、はあ……」

痛みから解放され、一息ついた次の瞬間、

「ほら、口を開けて」

あごをつかまれ、無理矢理開かされた口に、

「おぶっ!?」

触手が飛び込んできた。

「うぐ!?　ぐ、ぐぐぐぅ!!」

口の中で生臭い匂いとともに、触手が暴れまわる。

その匂いに早苗は顔をしかめた。

「うえ、なにこれ、信じらんない。ほら、貴方の好きな触手ですよ。思う存分しゃぶったらどうですか？」

「むぐぐっ、むぐっ、うぐっ！　むうっ!?」

じゅぶじゅぶと、さとりの口の端に白濁の泡を作りながら激しい勢いで口内を犯していく。やがて触手はドクンと脈打ち、一瞬その身を膨らませて――生臭い大量の精液を吐き出した。

「うぶぅっ!?　うぐっ、んぐっ……」

それを諏訪子の時と同じように半ば強制的に飲まされ、口の中の精液が無くなった頃合に触手が抜け落ちてようやく解放された。

「ごほっ、げほっ、うえ……」

口の中に残っていた精液の残滓を吐き出す。顔を涙と唾液と粘液で汚しながら、胃の中がずくりと、熱くうずくのを感じた。

ま、また、身体が、おかしくなる……イヤ……もう、こんなのイヤ……。

「うっ……ううっ……」

さとりが何もできない自分に嗚咽をもらし始めたとき、

「……なにしてるの？」

早苗は再びさとりのあごを持ち上げると、潤む瞳を見つめながら満面の笑みを浮かべた。

「な、なにって……」

その笑みを見てさとりは顔がこわばるのを感じた。聞こえた『声』と微笑む早苗の後ろ。

「まだ、たくさん残っているわよ。ほら」

早苗の背後にゆらゆらと幾本もの触手が鎌首をもたげていた。

さとりの口からずるりと何本目かわからない触手が抜け落ちた。
「……げ、ほ」
続いて力無く半開きになった唇から、もう飲みきれない精液がぼたぼたと床へ零れ落ちていく。
幾つもの触手がさとりの口を犯し、射精していった。その精液のせいで口の中が妙に甘ったるく、頭がボーっとして身体が熱い。特に、秘所がずくんずくんと鼓動の様に脈打っているのを感じる。
さとりは自分の内股を膣穴からにじみ出た愛液がとろとろと流れていくのがわかっていた。だけどそれをイヤだとも恥ずかしいとも考えない。触手の精液が持つ催淫効果が通常の思考能力を奪い去っていた。
ムズムズする。かゆみに似てるけどそうじゃない。どうすれば良いか知ってる。もう知ってる。口じゃない。アソコを……ああ、アソコがじんじんする。熱い熱いあついあついアツイアツイ……。
「どうしたの？　もじもじして」
早苗が聞いてきた。……愉しそう。なんか、諏訪子に似てる。でも今はそんなことはどうでもいい。
「あ……手、手を、手を解いて……」
そしたら、自分で、あんなうねうねしたおぞましい物じゃなくて、自分の手でできる。自分でこの疼きを鎮める事ができる。なのに

「ダメです。解いてあげません。それに、解いてどうするんですか？」
にやにやにやにや、早苗が笑っている。もちろん、何を考えているかなんてすぐわかる。『声』が聞こえるから。『覚って』しまうから。そしてその『声』でイラついてくる。
早苗の中では私が諏訪子を誘惑して堕落させた、まるでどこかの蛇のように考えている。
冗談じゃない。
「……私にそんな卑猥なことを言わせてどうしようというんですか？　……ああ、私が諏訪子を誘惑したと言わせたいんですか」
熱くなった身体の事も忘れ、早苗の心を先読みして言葉にしていく。
「私が誘惑ですって？　見ればわかるでしょう？　貴方がしたようにこのおぞましい、気持ちの悪いモノで無理矢理――っ!?」
だが、早苗は言葉を無視して背中側へ回る。その意図を『覚って』さとりは驚愕した。
「な、何をするの!?　や、やめて！」
早苗はその言葉も無視して、右手の御幣を振り上げると、その木の棒の部分を勢いよくさとりの白い臀部に叩きつけた。
「ひゃあっ!?」
ビシッっと鋭い音がして、さとりの叫び声が響いた。叩かれた箇所がみるみる赤く腫れあがっていく。
「私が聞きたいのはそんな言葉じゃありません！」
言いながら早苗は続けてさとりの尻を力一杯打ち続ける。
「や、やめ、ひっ!!」
「『覚り』なんでしょう？　だったらわかるでしょ？」
ビシビシと肉を打ち続ける音と、妙に熱のこもったさとりの悲鳴が地下室に響く。
「私が聞きたいのは貴方の本音、本性よ！」
「ぐうう……」
バシッと、ひときわ大きな音がしてさとりの身体が揺れた。早苗はぜいぜいと荒い息を吐きながらさとりの様子を見ていて、それに気づいた。
「……？」
触手に吊り下げられ、浮いているさとりの足先からぽとり、ぽと

りと垂れているものに。
「……っ!? あっ……」
早苗の視線に気づいたさとりが必死に足を閉じて隠そうとしたが、
「足を開かせて!」
早苗が命令すると、床から伸びた触手がぬるりとさとりの足首へ絡みつき、ぎりぎりと力をこめて開き始めた。
「あっ、ダメ! 引っ張らないで! 見ないでえぇぇっ!!」
足を震わせ抵抗するさとり。だがさとりの腕よりも太い触手の力に抗える訳も無く、徐々に足は左右に開かれ――
「ひう……っ!!」
じっと、自分の股間に早苗の視線を感じる。濡れそぼった秘裂に注がれる視線を。羞恥に全身を赤く染めながら少しでも隠そうと、さとりは身をよじるが、触手はびくともしない。
み、見られてるっ! 私の……私のが……っ! こんな、こんなの……。
「……はっ、あはははははっはははあっはははっはははっはははっはははっはあはははっ!! なんですかこれ? ねえ、なんでこんなグチョグチョなんですか? ねえねえ、教えてください よ!」
「……」
「教えてって――」
早苗は御幣を振り上げ、木の柄を、
「――言ってるんですよ!!」
さとりの半分皮をかぶったまま膨れ上がった肉芽へぐちゅっと、押しつぶすように突き立てた。
「ひぐうううぅぅっっっ!!」
目を見開き、身体をのけぞらしたさとりの叫び声とともに、膣穴からさらにぷしゅっと愛液が噴き出して御幣の柄が濡れた。

「うわっ……、また垂れてる。……ひょっとしてこういうのが好きなの? ねえ」
聞きながら、早苗が再度御幣の柄を肉芽にこね回すように押し付けた。
「ぐっ!? や、やめ、そこ、押さ、押さないで……っ」
「ねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえ」
「いいいいいいいいいいいいいいっっっ!?」
目がチカチカする。肉芽から波濤(はとう)のように押し寄せる快感で頭が真っ白になって全身が震え、自分の膣穴がきゅうきゅうとすぼまっていくのがわかる。
も、もう……きちゃう……っ!
さとりが身体を震わせる快楽の波に任せて上り詰めようとした矢先、早苗が御幣の柄を肉芽から離した。
「あ……」
も、もう少しだったのに……、もう少しで……。
途中で止められたせいなのか、さっきよりもさらに激しく秘所が疼く。酸欠にも似た、満たされない苦しみ。
早く……早く終わってくれないと、おかしくなりそう……っ!!
「あれあれ~? どうしたんですかあ? せっかくやめてあげたのに、残念そうですよお?」
早苗がまたにやにやと笑いながらこちらを見ている。彼女が何を求めているのかはわかってる。それはとても口にしたことも考えたことも無いような卑猥で屈辱的なこと。だけど――
「……や……で……」
「聞こえませんよ?」
「や、やめないで……ください」
声が震えているのがさとり自身でもわかった。けれど、この身体を鎮めるには、もう、それしかない。

「……ふ～ん、それだけぇ？　『覚り』なら……わかるんでしょう？」
「……諏訪子……様を、誘惑した、い、いやらしい私に、どうか罰を、与えてください……」
『声』の望むとおりに哀願の言葉を並べると、
「そう、それなら……」
と、早苗が言った。すると触手がさとりを宙吊りの状態からべたりと、上体を前に倒すようなうつ伏せの姿勢にして床へと下ろした。
「チャンスをあげてもいいですよ？　貴方がちゃあんと反省をしていることを見せたら、ね」
さとりの頭の上から早苗の言葉と『声』が聞こえる。そしてその『声』を聞いて安心した。
ああ……やっと、やっと、この苦しみから解放される。恥ずかしいけど、イヤだけど、本心じゃない。この場を、この疼きから逃れるための方便。だから、今だけ、今だけは――
床を這いずり、膝を立てて四つんばいになり、赤いミミズ腫れの走る尻を早苗に向けて突き上げる。
「……」
無言の早苗の視線が突き刺さる。同時に自分の陰部がどう見られているかも伝わる。
菊穴はひくひくと収縮を繰り返し、膣穴からは愛液があふれ、糸を引いて床へ滴り落ちて小さな水たまりを作っている、と。
羞恥に顔も身体も熱くなり、膝もぷるぷる震えるが、
――言うとおりに、しなくちゃ……。
自分を無理に納得させて、ずりずりと額を床にこすりつけて動かす。視線を愛液で濡れた股間の向こうの早苗に合わせ、
「お、お願いします。我慢できなくて、ぐちゅぐちゅになった、いやらしいさとりの、オ、オマ○コに、どうか触手達を……」
ぽたりぽたりと、落ちる雫の向こうの早苗にさらに哀願した。

「……ふ、ふふふ、貴方は触手が大好きなのですね」
逆さまの早苗が
「……は、はい、大好き、です。だから、だから――」
早く、早く、挿入れて――
「そこまで言われては仕方ありませんねえ。じゃあ、さとりさんを満足させてあげないといけませんね。――二度と諏訪子様を誘惑しないように、徹底的に！」
早苗が御幣を振り上げ怒鳴ると、さとりの足元へしゅるしゅると影が走り、素早く這い寄っていく。
「え……？」
ぞくりと、さとりの背中に悪寒が走った。這い寄ってきたのは確かに触手。男の親指くらいの太さの何本もの触手がぞわぞわとさとりの秘所を目指して太ももを這い登ってくる。飢えた、暴力的な性衝動の『声』とともに。
「う、うそ!?　こんな数、無理……っ!!」
「無理ぃ？　そんなの――」
触手達がさとりの匂い立つような濁った愛液の垂れる秘裂の下に集まり――
「試してみたらいいじゃない」
「あ、ああっ、待っ――あぐうぅっ!?」
束になった触手が、どちゅっと、鈍い、叩きつけるような音を立てながら、さとりの濡れそぼった肉の花弁を押し上げるように貫いた。
「あ、あぎ、あ、ひ、ぐうぅ……」
さとりは短い苦鳴を上げ、ミチミチと膣道から立ち昇る息の詰まるような圧迫から逃れようと、尻をぶるぶる震わせながら突き上げていく。それを見た早苗が、
「どうしたんですか？　大好きな触手じゃないですか。ちゃんと受

け入れないと！」
ビシッと、カ一杯御幣でさとりの尻を打った。
「ひゃぐっ!?」
その弾みで尻が下がり、触手がぎちゅりと膣の中へさらに深くめり込むと、緩んだ尿道からちょろちょろと尿が漏れ、肉芽を濡らしながら床へ垂れ落ちていく。
それを見て早苗は顔をしかめ、
「うわ、なんてだらしのない……。これはちゃんと躾けないといけません、ねっ！　ほら！　ほら!!」
再び御幣を振るい、さとりの尻をビシビシと打ち始めた。
早苗が叩くたびに縮む膣内がぎしぎしときしみ、触手の動きをより鮮明にさせる。
「あっ、ぎぃ、ゆ、ゆる、してぇっ……っ！　た、叩かない、でっ！　ひっ、響く、響いちゃうのぉっ!!」
「だったら、ちゃんと反省の言葉を口にしなさい、よ!!」
「あ、ああ…さ、さとりは…お、おしっこを、漏らす…だらしない、妖怪…で、す。は…反省して……ます。だから、だからもう叩かないでぇっ!!　ひっ、ひぐっ、うっ、うう……」
嗚咽しながら許しを請うさとりを見て、早苗はようやく手を止めた。
「はあ、はあ……は、反省しているようですね。うふ、うふふふ、ごめんなさいね。貴方の望みを叶えてあげたいものだから、ついカッとなっちゃいました」
息を切らせながらも暗い愉悦の表情を浮かべ、さとりの赤く腫れあがった臀部を撫でる。
「は、はい……ごめんなさい」
「じゃあ、貴方の中がどうなっているか私に説明して頂戴。ちゃんと貴方が満足してるのか知りたいの」
声は優しく、だが『声』は有無を言わせずさとりに自らを貶める発言を求める。
「は、はいぃ……わ、私の…さとりのオマ〇コの中は、しょ、触手で一杯になって…ぐっ、ぐにぐにって、うご、動いて…あ、ま、また入って、入ってくるうぅっ!!　裂けちゃう！　そんなに入ったら裂けちゃうっ!!」
触手が律動するたびに大陰唇がめくりあがり白く濁った愛液を飛び散らせる。膣道からはごじゅごじゅと触手が膣壁にこすれる音が身体に響いて聞こえる。その快楽にさとりの言葉が途切れてしまう。
「……私は『覚り』じゃないから、言ってくれないとわからないって言ったじゃないですか。それとも、もっと叩いて欲しいんですか？」
さっきとは打って変わった早苗の冷たい口調にさとりが慌てる。
「あっ、た、叩かない…で、んんっ…ごりごりって、お、おしつけられると、オマ〇コが、びくびくって…ふ、震え…て、あ、き、気持ちいいです。オマ〇コ気持ちいいですぅっ!!」
口に出して認めた途端、どろりと膣の奥から熱いものが湧き出すのを感じた。ぎちぎちに詰まっていた触手がそれを潤滑油にして滑らかに膣壁のヒダをこすりあげていく。
「あひぃっ!?　きゅ、きゅんきゅん、してるっ！　私のっ！　私の中でっ！　あ、ああっ！　いっぱい、いっぱいになってるうぅっ!!」
もはやさとりは意識せずに触手の動きに合わせて腰を揺らし、嬌声を上げている。触手を膣穴と中のヒダで扱きあげていく。
「あっ、あふぅ、膣内でうねって…る。ぐちゅぐちゅって…掻き回されて、んんんんっ!!」
広がったさとりの膣口が、きゅっと触手を締めつけるたびに愛液があふれて飛び散っていく。
「あんなに最初は苦しがっていたのにもう悦んでるなんて、本当に

下劣で淫乱な妖怪ですね、貴方は」
早苗はむしろ冷めた表情で快楽に身をゆだねたさとりを見下ろし、侮蔑の言葉を投げかけたが、
「あっ、はっ、はああっ、あんっ！　あはぁ!!」
さとりは早苗の言葉にも『声』にも耳を傾けずに行為に耽っている。それは諏訪子の調教じみた触手責めの成果。
「ふう……これでは罰になりませんね。もっと、もっと彼女を可愛がってあげて！」
早苗の声とともにまたぞろりと、触手達がさとりの陰部へ群がっていく。
「ひあっ！　あっ！　…う!?　え!?　ダ、ダメ!!　もう入らないからっ！　入らな……ひぅぅっっ!!」
触手と膣口のわずかな隙間へもメリメリと音を立てて触手が入っていく。
「ぐ…あ…が…っ!!」
膣を無理矢理引き伸ばすような、中で触手が膨らんでいく感触にさとりが絶句する。
「あはははっ、すごいすごい！　こんなの人間じゃ耐えられないでしょ!?　さすが淫乱妖怪！　どんどん入っちゃう!!　ねえ、気持ちいい？　ねえねえ、気持ちいい？」
「……っ!!」
もう嗜虐といってかまわない笑みを浮かべる早苗に、さとりは脂汗を流しながら口を金魚のようにパクパクさせるだけしかできない。それを見て早苗はさらに追い討ちをかける。
「あら、黙っているって事はまだ満足できてないみたいですね。もっと掻き回さないとダメなのかな？」
わざとらしく早苗が言って御幣を振り上げた。
「!?　や、やめ――」
「えいっ！」
さとりの哀願の声を無視して、御幣が膣穴に潜り込んでいる触手を叩いた。すると触手が鞭で打たれた馬のように激しく律動を始め、膣内を抉り始める。
「ふぐあああああああああああああああああああぁぁっっ!!」
背骨を折りそうなほど反り返ったさとりの口から絶叫がほとばしる。
膣穴の中で無数の触手が膣壁を打ち、ヒダを押しつぶし、子宮口を激しくノックする。
「ひあぁっ!?　ひぎっ!?　ぐうぅぅっ!!」
内臓を直接嬲られる様な律動に、押しつぶした声が勝手にさとりの口から漏れる。
「ほらほら、もっと激しく！　もっともっと!!」
早苗が御幣で打つたびに触手が暴れ狂う。膣内にひしめきあう触手がさらに奥へと満ちていき、やがて――
「う……ぐ!?」
膣の奥にある外子宮口の狭い口を押し広げ、子宮頸部へ這い入ってきた。ぬるりと内臓を撫でられるような感触に戦慄を覚える。
「お、おく、おくに……はいっで……ダ…メ、そこ…ちが……」
子宮奥の子宮底までみっしりと触手が満たし、子宮内膜まで圧迫する。
「が…はぁ……ぐぅ……うぅっ」
子宮が胃までせり上がってくる感覚に呼吸が浅くなって、からだがぶるぶる震える。だが早苗はそんなさとりを眺めても、
「うーん、さすがにもう入らないかしら？　……そうだ！　逆さまにしてみたらもう少し入るんじゃない？　ねえねえ、足をもっと上に引っ張りあげて」
早苗の命令で触手がさとりの足を上へ引っ張り上げる。後ろ手に

縛ったまま頭を下にYの字のように吊り下げ、さとりの腹部を早苗の眼前にさらしていく。
「わ……」
早苗が驚きの声を上げた。さとりの下腹部が膣口から子宮までお腹の上からでもわかるほどぽこりと膨らみ、入り込んでいる触手がじゅるじゅると出入りをするたびに、それに合わせるようにもぞもぞと蠢いている。
「すごーい！　こんなにお腹が膨らんで……ね、見える？」
早苗は嬉しそうな声を上げてさとりの膨らんだ下腹部をさする。
「ぐうっ！　さ、触ら…ないで、くっ、くるし……」
「ふふふ、ほらこんなにボコボコでうねうねしてて……」
早苗は苦鳴に耳を傾けることなく、さとりの腹の中の触手を確かめるようにぐいぐいと手で押し込んでくる。
「うっ!?　ぐっ!?　ぐうううううううっっっ!?」
子宮の内壁がぎゅうっと押し付けられて、内部の触手がびちびちと暴れるように跳ね、さとりの腹が早苗の手の中でぐねぐねと波打つ。
「……っ……っっっ!!」
さとりが過呼吸を起こしたように身体を悶えさせる。早苗はそれでもさとりの腹を撫で、
「あらら、大変そうですね。でも――」
膨らみをさすりながら、
「触手が満足したら終わるんじゃないですか？」
にこりと、優しい笑みを浮かべて言った。
「……えっ!?　ふぐっ!?　うぎいっ!?」
その言葉の意味を身体で理解する。子宮そのものを突き破らんばかりに触手の暴力的な律動が始まった。
触手が激しく出入りする膣口から、生臭い粘液と愛液が交じり合った白濁液がぽたぽたとさとりの顔に降り注いでいく。
「あっ！　ああ……っ！」
みっしりと詰まった触手が、子宮底から膣口までつながった巨大な男根のようにさとりの胎内をかき乱す。ぐぽっと大陰唇を伸ばして引いて、ぞぶりと膣口を押し広げて子宮底へ突き刺さる動きに、さとりの声も次第に熱を帯び始めた。
「あぅっ！　あっ、あああぁっ!!　ふか、深いいいいいっっ!!け、けずれちゃう、私のオマ〇コ削れちゃうううううっっっ!!」
送られてくる快楽が強すぎて手足がしびれる。浮遊感に包まれ、身体が浮いていくような錯覚――この地下で身体にしみこまされた絶頂への予兆。
こんな、こんなひどい目に合わされてるのに、イかされるなんて……っ!!
心のどこかで否定しても、敏感になった身体はこらえきれずに思考が真っ白になっていく。
「ダメッ!!　きちゃうっ!!　きちゃうううぅぅっっっ!!」
足の指先が丸まって背が反り返る。快感に染められた神経と思考が一点に集まり凝縮したとき、ズンッと一際強く子宮底を突かれ――爆ぜた。
「あはあああああああああああああああぁぁぁぁぁぁっっっ!!」
何も見えない白い視界の中、全身を極限まで反らしてビクビクッと痙攣を繰り返し、胎内の触手を絞るように締め付けて絶頂に達した。
「～～～～～～っっっ……あぁ……」
肺の中に残っていた空気を余韻のように吐き出すと、こわばっていた全身の力が抜けて弛緩した。
「あ～あ、こんなのでもイっちゃうんですか？」
早苗はむしろ驚いた風に聞いてきたが、それに答える気力もなく、

頭を小さく振るだけだった。
「……でも、まだ終わってないですよ」
早苗がその言葉を口にすると、絶頂の収縮が収まらない膣内で触手が再び蠢き始めた。
「あ……ひぎっ!?　ま、まだなのっ!?」
締め付けられていた分を取り戻そうとするように、さらに激しく。達した後の敏感になりすぎた胎内の刺激が、苦痛となってさとりを苛む。
「ひっ!?　や、やめっ!!　ひぐっ!!　もう、終わってよぉっ!!」
さとりの泣き叫ぶ声のせいか触手はますますいきり立ち、膣道や子宮内で膨れあがっていく。
苦痛と等価の快楽に涙を浮かべて喘ぐさとり。早苗がその顔を覗き込み、告げた。
「早く終わるようにお願いしてあげたわ。嬉しい？」
「あぐ…うれ、うれしい……ですぅっ!!」
もう『声』を聞かなくても早苗になんと答えればいいかわかっている。早苗に媚びようが、何しようが、とにかくこの責め苦が終わればいい。
「ふふふ、お腹全部が触手専用の穴みたいになってる。ねえ、中はどうなってるの？　触手は満足しそう？」
「は……い。ごりごりっ…て、お腹で……うね、って、も、う…いっぱい……で、しょ…触手達も喜んで……」
さとりの膣内から子宮の底まで触手の触れていない場所はない。触手達の肉の贄を食る饗宴が繰り広げられている。
そしてその宴の中で一つの望んでいた『声』が聞こえてくる。滾った精液をさとりの中に吐き出そうとする牡の欲望。
「あっ、ぐぎぃ!!　おく、おくいっぱい!!　わたし、私の中……いっぱいになって……っ!!　あ、も、もう…すぐ、で、出て……くれ……るっ!!」
終わる。もう終わってくれる……。
「あら、もう終わりそうなの？」
「は、はい。もう……すぐ、もうすぐ、満……足してっ…」
膣内をかき混ぜる粘度の高い濁った水音の中で、それでもどこか安堵したような声で言ったさとりに、早苗がその激しく波打つ腹を押さえ、
「ふふふ……こんなにたくさんの触手が――」
楽しそうに、愉しそうに、笑う。
その笑みはとても、
「――いっぺんに出しちゃったら、中はどうなっちゃうんでしょうね？」
とてもあの神に似ていた。
膣道で、子宮で、胎内であふれかえっている触手が射精をしたら、その出した精液はどこに……？
「あ……あ……あああああああっ!!　やめて！　待って！　待ってぇっ!!」
「出るの？　ねえ、出るの？　うふ、うふふ、あはははあはははは」
早苗の中の黒い泥から湧き出る暗い昏い悦び。それは私を堕落させることではなくて残酷に裏切ることを悦ぶ、ニンゲンだけが思いつく、おぞましい思考。
「やめて！　止めて！　抜いてえええええええぇぇぇっっ!!」
「あはははっはははっはっはっは

『声』が聞こえる。さっきまで待ち望んでいた、でも今は恐怖でしかない触手達の射精の衝動。
胎内で触手達がその身をくねらせてぐぐっと膨れ上がっていく。
「出さないでっ!! 中でっ、中で出さないでええええええええええええええええええええええええええええええええっっっ!!」
その瞬間、ドクンと、胎内が震えた。
「ひ……」
膣穴から子宮までを埋め尽くしていた触手達が精の奔流を吐き出した。
「――――――――――――っ!!――――――――――――っっ!!」
絶叫は声にならなかった。味わったことのない苦痛に目を見開き、身体を震わせ悶える。
膣口でひしめき合う触手が蓋になって、吐き出された熱い精液がさとりの中を満たしていく。
律動などという生ぬるいものではない、塊を打ち続けるような衝撃が絶え間なく身体を揺らし、行き場の無い精液がさとりの子宮をありえないほど膨らませていった。
「……あは、まるで赤ちゃんがいるみたいですね」
妊婦のように膨らんださとりの腹を、早苗は愛おしい物を扱うように撫でてつぶやいた。
「……」
さとりは全身を痙攣させ、何の反応も返さない。
「あらら、仕方ありませんねえ……皆さん、どいてくれますか?」
早苗の指示で触手達が膣穴からずるずると抜けていく。隙間が出来た途端、ゴボゴボと音を立てて精液が噴き出し、逆さ吊りのさとりの身体を流れ落ちていく。
「あ……ぁ……」
焦点の定まらない瞳を閉じてさとりは闇へ落ちていく。その頭の下で、びしゃびしゃと流れ落ちた触手の精液が水たまりを作っていた。
「あれ? もしもーし」
早苗が御幣でさとりの頬をぺちぺち叩いた。
「……」
反応がない。さらに強く叩こうかと思ったが――止めた。
「……自然に目を覚ますのを待った方がいいかな? それとも無理矢理起こしてまだ続けると言った方が……」
どちらがよりさとりを絶望させることが出来るのか。
「うーん……あ、それとも」
しばらく放置して、また諏訪子様を誘惑したときに……。
「……うふ、うふふ、罰はまだ終わっていませんものねえ」
気絶したさとりを見下ろしながら早苗は笑う。
それは無邪気ではないけれど、
とてもとても愉しそうで、
彼女が敬愛してやまない、
神様に良く似ていた。

「うーん、早苗ったら無茶しちゃって……。あんなことしてたらすぐ壊れちゃうよ」
諏訪子は地下室の扉の隙間から顔を離すとつぶやいた。
まるで子供が手に入れた玩具を加減せずに、目一杯振り回して結果壊すように。
諏訪子はそこまで考えて、
「早苗もまだまだ子供って事だね。あはははは」
けらけらと笑った。無邪気に。
「さあて、次はどうしようかなあ？」
早苗のことは知らんぷりしてまたさとりで遊ぶか……。
「……でも早苗ってばちゃんと自分のこと口止めしてるかな？」
『覚り』相手に今日の事を私も知らんぷりは面倒だよねえ。
「それか早苗と一緒に遊ぶって手もあるけど……」
早苗の遊び方じゃあ、すぐに壊しちゃいそうだし。だけど、もう少しあの早苗をこっそり見ていたいかなあ。
「それとも……」
早苗で遊ぶか。
「……あは、あはははは、それをやっちゃったら、もう後はないだろうねえ。でも――」
逆に言えばそれまでは後があるってことかもね。
「……おろ？　神奈子？」
境内で神奈子の声がする。
「神奈子でも簡単にここが見つけられるとは思えないけど、まだ見つかりたくはないかな？」
諏訪子はつぶやいてひょいっと、階段を上って境内へ向かう。
境内に戻ると神奈子が鳥居下で所在なげに立っていた。
「呼んだ？」
諏訪子は変わらずに無邪気な笑顔で神奈子に声をかけた。
「あ、諏訪子。どーこほっつき歩いてたんだい」
「ちょっと遊びに行ってたんだよー」
「早苗は？」
「んー、妖怪退治？　懲らしめてるみたいだよ」
「おやおや、張り切ってるねえ。でもあんまり退治だけって言うのもなあ……」
「別にいいんじゃないかな。元気があって」
「最近は諏訪子諏訪子ばっかり言ってたから、ひょっとして諏訪子に遊んでもらえない八つ当たりじゃないか？」
からかうように神奈子が言った。
「あはははは、だとしたら妖怪も可哀想だねえ」
「まったくだ。いつまでたっても子供で困る」
「うんうん、まだまだ子供だねえ」
「でも、諏訪子の言うとおり、元気があるってのはいいことだ」
「でしょ？　元気があるのはいいことだよ」
諏訪子がそう答えると、神奈子は人里の方角を眺め、確かめるようにつぶやいた。
「……なあ諏訪子、幻想郷にきて良かったよな？」
「……そうだね。きて良かったと思うよ。幻想郷はとても愉しいところだからね」
諏訪子は満面の笑みを浮かべて神奈子にそう答えた。

さとりの部屋
～早苗～

完

どうも、サークル玉よ砕けろの三等兵です。
本誌さとりの部屋〜早苗〜の本文を担当いたしました。
現在締め切り数時間前です。ヤバイです。
ネタもないので友人と内容について会議した時のログ

ねずみ: さとりは嫌々股をひらいた
ねずみ: 早苗「うふふ・・・きれいなユニバース・・・」
ねずみ: さとり「いや・・・宇宙がもれちゃう」
はいはっと: さろり「だめぇ私のトロイホース触らないで」
はいはっと: 早苗「うふふ・・・貴女の弾幕はとても濃いですね」
三等兵：よしわかった。お前らそこに並べ

そんなこんなできました。楽しんでいただけたら幸いです。
眠い上に自分の原稿もあるのに校正を手伝ってくれたいづき氏、
本当にありがとう今度替え玉くらいおごります。
最後にお誘いしてくださったふみひろ氏、
東方Project原作のＺＵＮ氏
それと本誌を手に取ってくださった皆様に最大限の感謝を

三等兵

うわーぅ
今回もギリギリだぁ…

ごめんなさい… orz

ふみひろ

■奥付■

発行　：夜の勉強会（ふみひろ）
発行日：2011/10/16
印刷　：くりえい社様

http://www5b.biglobe.ne.jp/~yoru/
yoru@mva.biglobe.ne.jp

無断転載・無断複製・18歳未満購読禁止

夜の勉強会
FOR ADULT ONLY